

平成28年度 第3学年入学者選抜学力試験問題

一般科目

国語

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
- 2 問題用紙は10ページで、解答用紙は2ページあります。試験開始の合図があってから確かめなさい。
- 3 監督者の指示に従い、解答用紙の各ページに受験番号を算用数字で記入しなさい。氏名を書いてはいけません。
- 4 文字などの印刷に不鮮明なところがあった場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 問題用紙の余白は下書きとして利用してかまいません。
- 7 試験終了後、配付された問題用紙は持ち帰りなさい。

問題用紙（国語）

I

次の文章は、河野哲也「海洋・回復・倫理」の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。
なお、本文中の語句の右肩の*は、文章の最後にある（注）の記号である。

まず善悪の定義から考えてみよう。私はまず単純に以下のように定義してみたい。道徳的に善いことは、他者の利益になることをすることであり、道徳的に悪いことは、他者の不利益になることをすることである。端的に言えば、道徳的（道徳的に善であること）とは、利他的であるということである。私たちは、自分も気づかないうちに他者に対して何らかの影響を及ぼし、それがその人の利益になったり不利益になったりすることがある。しかし、私たちが通常、善悪と呼ぶものは、意図的になされた他者への利益であり不利益である。

では、^A利益と不利益はどのように定まるのであろうか。利益とは、それぞれの人をより動的にして、さらなる運動を促す可能性を与えるものである。利益とは、単純に現在の快感をもたらすものであるよりも、行動の可能性を拡大するもののものである。これをヘルクソンの^{*}置き換えれば、道徳とは人間の創造的運動性を促進させることである。一般的に言えば、所得、富、資源、知識、技術、自由、心理的安定などは、人間にとっての利益である。いくつかの利益は人間に共通であり、とくに生存の条件となる衣食住はそうである。自由や生存に必要な基本的知識や技能も、人間共通の利益と言えるだろう。これらのものが利益と考えられるのは、それが単に一時的な快感をもたらすというよりは、次なる行動への可能性を開き、より広い生活の幅、選択の自由の幅をもたらすからである。不利益とは、^アある人の行動の可能性を傷つけ、縮小するものである。その極限が、あらゆる可能性のソウシツとしての死である。

利益とは、個々の人間の可能性の開発であると定義できるだろう。他者の^{*}ケイパビリティを開発することこそが、道徳実践（善）である。ここで言う「ケイパビリティ」とは、もちろん、^{*}アマルティア・センと^{*}マールサ・ヌスバウムが発展させた概念を意味している。彼らのケイパビリティの概念をごく簡単に説明しよう。

ケイパビリティとは、どのような状態にある人々が福祉の対象となるか、その基準を定めるために、センが提起した概念である。ケイパビリティとは、ある人にとって選択可能な「機能（functioning）」の集合である。機能とは、人間の生活における「活動（doing）」や「状態（being）」のこと、すなわち、その人が「どのようなことができるのか」「どのような人になれるのか」を意味する。たとえば、「適切な栄養を得ているか」「健康か」「^イけられる病気にかかっていないか」「自尊心をもっているか」（以上は「状態」）、「社会生活に参加しているか」「教育を受けているか」「職に就けているか」「政治家として活動することが可能か」（以上は「活動」）が、その例である。機能とは、生活においてその人が、実質的に何ができるかを表した概念である。その人がどのような機能を達成できるかは、その人が利用

問題用紙（国語）

できる選択肢の範囲を示している。ケイパビリティとは、これらの機能を可能にする潜在性である。よって、ケイパビリティは、生き方の幅、自由の幅を意味する。

人間の成長には終わりがなく、ケイパビリティの開発にも終わりがなく、すでに十分に恵まれた人間のケイパビリティをさらに向上させることも道徳的に善いことである。教育は、可能な限り、ある人のケイパビリティを開発しようとする。教育はそれでよい。しかし、道徳は教育と同じものではない。道徳という概念のなかにすでに公平性の意味が含意されている。私たちの持てる労力と資源に限界がある以上、通常、道徳実践は、より恵まれていない人びとの利益のために差し向けられるべきであろう。すなわち、私たちは、ベルクソンの動的道徳の重要性に同意しつつも、具体的に社会的な基準として、どのレベルまで、ある人のケイパビリティを開発することが公平であるかを考えなければならぬ。

そこで、十分に恵まれていない人びとのケイパビリティは、どの程度まで向上させるべきであろうか。ある人のケイパビリティをどこまで伸ばすことができれば、公共的な道徳実践としては十分なレベルに達したと考えられるだろうか。私は、「レジリエンス (resilience)」という概念を、^{*}ミニマルな福祉の基準として提案したい。すなわち、ある人を生存のためのレジリエンスを持った存在とすることが福祉の目的であり、それが広く社会において実行されるべき道徳実践なのである。

C レジリエンスとは、「攪乱 (disturbance) を吸収し、基本的な機能と構造を保持し続けるシステムの能力」、一言で言えば「回復力」や「復元力」を意味する。

レジリエンスは、本来の物性科学の用語では「弾性」や「弾力」、「復元力」を意味する。だが、この用語が注目されるようになったのは、一九六〇年代の生態学や自然保護運動の文脈においてである。ここでは、レジリエンスが、生態系が変動と変化に対して自己を維持する過程という意味で使われる。しかし、ここでの自己の維持とは、機械的な復元としての自己回復ではない。複雑な環境の変化に対して創造的に応じることで初めて達成できるような自己維持なのである。

環境保護や生態学の分野では、レジリエンスの概念は、二重の意味において使われているように思われる。すなわち、人間の諸活動、たとえば、開発や建築物の構築、人口増加、汚染に対して自然が自己を維持する能力と、もうひとつは、人間の構築物（建物、道路、都市など）が自然からの影響に対処する能力である。前者の意味は、持続可能性 (sustainability) に近い意味となり、人間の産業がもたらす災害に耐えて回復する自然環境は、回復力があると言われる。後者のレジリエンスは、人工的環境や人工物が、その外部環境からのストレスや災害、変化に対して、十分に対応できるほど柔軟に構築されていることを意味している。

さらに一九八〇年代には、この用語は心理学や精神医学、^{*}ソーシャルワークの分野で使われるようになり、ストレスや災難、困難に対処して自分自身を維持する力や、病気や変化、不運から立ち直る個人の能力を指すようになった。^{*}マーク・フレイザーは、エコロジー理論を子どものためのソーシャルワ

問題用紙（国語）

クと教育の分野に応用しながら、レジリエンスの概念の重要性を強調する。従来は、クライアントの問題を専門家がどう除去するかという医学中心主義的な視点でソーシャルワークが行われていた。問題の原因は患者にあるとして、患者を専門家に依存させてきたのである。これに対して、エコロジカルなソーシャルワークは、患者の自発性や潜在能力に着目し、患者を中心においた援助や支援を行うようになる。ソーシャルワークは、人間と社会環境の間の相互作用に働きかけることにある。クライアントの支援は、本人をただゴブして社会に適応させるのではなく、本人の持つ力を最大限に発揮できるような環境をいかにして提供するか、本人の回復する力（レジリエンス）が活かせる環境をどうすれば構築できるかといった主体と環境との相互作用の開発にある。

さらに、近年のエンジニアリングの分野においては、レジリエンスは、安全に関する新しい発想法として登場した。レジリエンス・エンジニアリングとは、複雑性を持つ現実世界に対処できるように、強靱で柔軟性に富んだ組織の能力を高める方法を見いだすためのものである。レジリエンス・エンジニアリングでは、安全は構成部分、サブシステム、ソフトウェア、組織、人間行動の相互作用から創発してくるシステムの特徴と見なされる。安全とはシステムや組織が有している特徴ではなく、システムや組織が生み出す特徴なのである。したがって、安全性の確保は、大きな失敗が生じる前に変化を予期して、それに早く対処する能力に依存する。システムは、期待されていた条件の不規則な変化や攪乱、悪化から回復するレジリエンスを持たなければならない。それゆえに、レジリエンスは、システムの稼働状態と外部状況に関する連続的なモニタリングを要求する。このようなエンジニアリングの分野では、レジリエンスは、環境の変化に対して自らを変化させて対応するという意味で「柔軟性（Flexibility）」という性質にきわめて近いものとして解釈されている。このエンジニアリングの発想は、単に機械に対してだけではなく、事故をフェぐための組織作りや災害に対する共同体の備えを構築するためにも拡張されるものである。

ケイパビリティの開発は、ある人間個人の選択の幅を広げ、自由を拡大する。福祉によって維持されなければならないケイパビリティとは、本人が自己維持のためのレジリエンスを持ちうるような一群のケイパビリティである。福祉（すなわち、社会的な道德の実践）に利用できる資源が限られているならば、すべての人が一定レベルの持続的な生活が可能となる水準を目当てにして、ケイパビリティの開発をしなければならぬ。ここでのケイパビリティの開発のショウテンは、持続的で創造的な自己維持にある。福祉の対象となる人びとに必要なのは、環境の変化に対しても、一定以上の生活の質を維持できるように一群のケイパビリティである。いや、より正確に言えば、それらの一群のケイパビリティを調整的に開発していけるような本人を含めた環境システムである。

（問題作成の都合上、原文の一部を省略した。）

問題用紙 (国語)

(注) ○ベルクソンⅡ一八五九〜一九四一。フランスの哲学者。人間の本质は、運動し、新しい創造を行う可能性にあり、道徳とは、この力を促すためのものであるとした。○ケイパビリティⅡ (capability) 能力。才能。可能性。将来性。○アマルティア・センⅡインドの経済学者。ハーバード大学教授。○マーサ・ヌスバウムⅡアメリカの哲学者。シカゴ大学教授。○ミニマルⅡ最小の。最小限の。○ソーシャルワークⅡ社会的な問題の解決を援助するための社会福祉の実践的活動。○マーク・フレイザーⅡアメリカ、ノースカロライナ大学チャペルヒル校スクール・オブ・ソーシャルワークの特別功労教授。○クライアントⅡ依頼人、相談者。社会福祉機関による援助・サービスの対象者。

問一 傍線部ア〜オのカタカナを漢字に直せ (楷書^{かいしょ}でていねいに書くこと)。

問二 傍線部A「利益と不利益はどのように定まる」のか。「利益」「不利益」それぞれについて、本文中から一五字以上二〇字以内(句読点・括弧類も字数に数える)の部分をもそのまま抜き出して答えよ。

問三 傍線部B「ケイパビリティの開発」とはどういうことか。本文中の語句を用いて五〇字以内(句読点・括弧類も字数に数える)で説明せよ。

問四 傍線部C「レジリエンス」は、環境保護や生態学の分野、また心理学や精神医学、ソーシャルワークの分野では、どのような概念か。次の1〜5について、その説明として適当なものには○、適当でないものには×をつけよ。

- 1 一九六〇年代の生態学や自然保護運動の文脈では、生態系が複雑な環境変動の影響から元のよう
に回復することで自己を維持する過程という意味で使われる。
- 2 環境保護や生態学の分野では、自然環境だけでなく人工的環境・人工物についても、外部からの
影響に創造的に応じつつ自己を維持する能力という意味で使われる。
- 3 心理学や精神医学、ソーシャルワークの分野では、ストレスや災難、病気や不運などにより抱え
た問題を専門家に除去してもらい立ち直る個人の能力を指す。
- 4 エコロジカルなソーシャルワークでは、患者の自発性や潜在能力に着目し、社会への適応力を育
てることで形成される自分自身を維持する力を指す。
- 5 エコロジー理論を応用したソーシャルワークの分野では、主体と環境との相互作用を重視し、適
切な環境の提供により最大限に発揮される本人の回復力を指す。

問題用紙（国語）

問五 傍線部D「安全に関する新しい発想法」では、どのようにして安全性を確保しようとするのか。本文中の語句を用いて六〇字以内（句読点・括弧類も字数に数える）で説明せよ。

問六 次の1～5について、本文の内容に合致するものには○、合致しないものには×をつけよ。

- 1 所得、富、資源、知識、技術、自由、心理的安定などが人間にとっての利益であるのは、これらのものが生存に必要なという点で人間に共通だからである。
- 2 ケイパビリティとは、ある人が生活において「どのようなことができるのか」「どのような人になれるのか」という機能を可能にする潜在性である。
- 3 福祉、すなわち公共的な道德実践は、人びとのケイパビリティの公平な開発を社会的基準として考え、より恵まれていない人びとの利益のために差し向けられるべきである。
- 4 システムの稼働状態と外部状況に関する連続的なモニタリングによって、事故や災害が起きても安全という特徴を持つシステムや組織を実現することができる。
- 5 ある人を生存のためのレジリエンスを持った存在とすることが福祉の目的であり、そのための一群のケイパビリティを調整的に開発していける、当人を含めた環境システムが必要である。

（以下 余白）

問題用紙（国語）

Ⅱ 次の文章は、八木清治『旅と交遊の江戸思想』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

なお、本文中の〈白文〉は出題者が挿入したものである。また、語句の右肩の*は、文章の最後にある（注）の記号である。

かつて平戸遊学の折の記録『西遊日記』の冒頭に、松陰は「心は本活く、^{*}活くる者には必ず機あり、^{*}機なる者は触るるに従ひて発し、感ずるに遇ひて動く。発動の機は周遊の益なり」と記し、心（主体）がもの（対象）と出合う機縁となる点に旅の効用を見出していた。とはいえ、『西遊日記』中の松陰は、最新の海外情報書に接してひたすら読書と書写に励む一書生の域を出ていない。この時点では、松陰は書生であつても志士ではなかつたのである。^{*}

a、東北遊歴時には明確に志士としての自覚が生まれ、次のような注目すべき考えも示されるのである。

人皆曰く、「博く学んでしかる後遠遊す」と。僕は則ち遠遊して而る後に博く学ぶ。逆行順絶、孰れか得、孰れか失、未だ知るべからざるなり。

ここに見られる旅の積極的な位置付けは、読書よりも行動を重んじる志士の学問観を端的に示しているように思われる。遊歴の主なる目的は、天下を跋涉し天下の豪傑と交わり、「氣胆を張り才識を長ずる」ことであり、それこそが志士の求めた旅の学問に他ならないからである。

幕末の青年武士の旅のかたちを別の観点からとらえてみると、そこに本来性格を異にする旅の二つの要素の統合を見出すことができる。

b、幕末期には「遊学」と「遊歴」が同時進行的に展開していることである。例えば、吉田松陰の場合、平戸遊学は九州遊歴を含み、東北遊歴は江戸遊学の期間を利用して実行された。一般的に「遊学」は、特定の目的地（主に江戸や京都や長崎など）を定めて、

大体は三年程度の期間滞在して就学するという意味で用いられ、各地をめぐる周遊旅行としての「遊歴」とは概念的に区別されるが、幕末の特徴は後者が前者に組み込まれている点に求められるように思われる。

言うまでもなく、青年武士を対象とする遊学制度の普及は、幕末の諸藩に共通して認められる文教政策の特徴に他ならなかつた。『日本教育史資料』を通じて、維新前の教育に関するキサイのある二百三十八藩のうち二百十八藩が遊学を行つていたことが判明している。また、遊学制度の成立年代が判明する六十二藩のうち四十一藩は天保期以降であり、幕末の青年武士の自己形成に果たしたその役割の大きさを予想させる。遊学こそ幕末期を代表する旅の形態であり、遊歴も遊学の延長上で行われた。文人の遊歴が遊学と内容的に異なるのに対して、幕末の青年武士において遊歴も遊学も文武修行であることに変わりはなかつた。すでに指摘したように幕末には武術のシンクウにともない武者修行が流行し、また地方諸藩の遊学者の多くが剣術修行を目的としていたことは、こうした傾向にハクシャをかけたに違いない。

問題用紙 (国語)

幕末の青年武士の行動に照らしてみれば、他国へ出て特定の教育機関で学ぶだけではなく、できるだけ多くの諸国をめぐることも文武の修行であるという意識が広く定着していたと考えられるのではなからうか。松陰以外の人々においても、旅の効用はさまざまな形で説かれている。例えば、尊攘激派の活動家真木和泉(一八一三〜六四)は、文久二年(一八六二)に至つてさえ、久留米藩に対し人才を育成する手段として遊学を強調している。

今日にさし向^wひて遊学とは気長^xき事なれども、必ずしも読書に限らず、京・江戸は勿論^{もちろん}、諸藩に漫遊し、可^r然師もあらん。一年半二年或は三年にても隨身^{ずきん}して、修身・治人の実学を習^yはしむべし。家老の子の如^{ごと}きは、京にて諸藩の志士と周旋^{しゅうせん}し、或は諸藩を巡遊するばかりにても大きに益あるべし。(『維新秘策』)

幕末において、遊学は遊歴を含みつつ、単なる書物の学問でない実学を学ぶためにもその必要性が自覚されたといえる。

c、松陰の弟子高杉晋作(一八三九〜六七)は、再度の江戸遊学の後、「予常に天下を跋涉するの志あり。而して未だその半ばを盡^{つく}さず。因りて東北陸を跋涉して帰省せんと欲す」と、万延元年(一八六〇)八月に、各地で「撃剣^{げきけん}」を試みながら、江戸から笠間・日光を経て信濃に向かい、北陸路を高田・富山・福井と進み上方へ出た。この遊歴の記録である『試撃行日譜』小序には次のように記されている。

その跋涉するところの名山大川、その交りを結ぶところの奇人偉士、その議論とその形勢と、目のふるところ、心の動くところ、皆^c以つて我が終身の事業の基となさんと欲す(白文^z)、皆欲^z以為^z我終身事業之基。(『試撃行日譜』小序)

高杉がこの遊歴に求めたものは、かつて松陰の江戸遊学の抱負である「卓犖慷慨^{たくらくくわい}の士と交はり、豪談劇論し、以て吾が浩々然たるものを養ふ」(嘉永四年四月二十一日、兄杉梅太郎宛^{あて})に通じるだろう。

d 高杉のそれは、武者修行を名目として「奇人偉士」、具体的には笠間の加藤有隣、松代の佐久間象山、福井の横井小楠^{しやうなん}等と交わり議論する目的をもつものであった点に、幕末青年武士の遊歴の特徴をよく示してくれている。帰萩^{きせ}後江戸遊学中の久坂玄瑞^{げんずい}に宛てた万延元年十一月十九日付の書簡で、高杉は「道中五十日余り程かけ申し候。色々様々の事に出合愉快の事に御座候。遊歴は学文実着に相成り、益を得ること少からず候。僕この節、三年閉戸読書の志起こり候が、その策下すに何如致^{いか}したら宜しく候や、御存じ寄り承り度候」と遊歴の効用を伝えている。遊歴もまた学問の一つであったこの時代のフニキを妙実に物語る一節でもあろう。

e、このように若い武士たちが遊学ないし遊歴を行うことは、幕末という近世から近代への過渡期において、どのような思想的意義をもったのか。志なかばにして斃^たれた者たちにはそれを改めて対象化しうる余裕はなかつたろうが、後年大隈重信(一八三八〜一九二二)は「往復交通に由^よて得たる

問題用紙(国語)

利益」「交通の利益」を強調し、その知的な意義について次のように語っている。

彼等は、是まで知識の価値を一向に知らざりしなり。多くは佐賀藩の人なることを知て日本国の人なることを知らざりし。況んや、其世界の人たるべきの理に於ては影だにもなかりしなり。然るに今や機を得て、自ら江戸に到り、且諸藩の形勢を耳目したるに及て、事物に大に異同あるを知りたり。是こそ智識と判定とを生せしむる所の基礎なれば、即ち彼輩は多少の智識と判定なるものを得て、而して其実地に経歴し来りたる事実を口より口に伝へたり。(『大隈伯昔日譚』)

このように大隈は、多数の藩士たちが「武術修業若しくは遊学の名の下に」他郷に出ることで、知識の集積や情報の伝達が促進され、藩から日本へ、そして世界へと視野が拡大していったという。幕末の旅を考える上で、あまりに知的側面を偏重し過ぎるきらいはあるが、その経験が「近代」へと引き継がれていく側面をタクみに言い当てていることは確かであろう。

(問題作成の都合上、原文の一部を省略した。)

(注) ○平戸Ⅱ長崎平戸藩の城下町。 ○松陰Ⅱ吉田松陰(一八三〇～一八五九)。幕末の尊王思想家。長州藩士。 ○志士Ⅱ身を犠牲にして国家・社会のために尽くそうとする高い志を持つ人。 ○跋涉Ⅱ諸国を遍歴すること。 ○天保期Ⅱ一八三一年～一八四五年。 ○真木和泉Ⅱ幕末の尊攘派志士。筑後久留米水天宮の神主。 ○隨身Ⅱ付き従うこと。 ○周旋Ⅱ動き回ること。 ○高杉晋作Ⅱ幕末の志士。長州藩士。 ○撃剣Ⅱ剣術のこと。 ○卓犖慷慨Ⅱ他よりぬきん出てすぐれており、社会の不義や不正を憤って嘆くこと。 ○浩々然Ⅱ気持ちなどが広くゆつたりしているさま。 ○加藤有隣Ⅱ一八一～一八八四。儒学者。常陸笠間藩士。 ○佐久間象山Ⅱ一八一～一八六四。幕末の思想家・兵学者。信州松代藩士。 ○横井小楠Ⅱ一八〇九～一八六九。幕末の儒学者・開国論者。熊本藩士。福井藩主に招かれ顧問となる。 ○久坂玄瑞Ⅱ一八四〇～一八六四。幕末の志士。長州藩士。 ○学文Ⅱ学問に同じ。 ○実着Ⅱ着実。確かなこと。 ○閉戸Ⅱ戸を閉ざし家にこもること。 ○大隈重信Ⅱ政治家。佐賀藩士。明治・大正期に首相となる。

問一 傍線部ア～オのカタカナを漢字に直せ(楷書でていねいに書くこと)。

問二 空欄 a に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次の1～5の中から一つずつ選び、番号で答えよ(二つの語は一つの箇所にはか入らない)。

- 1 ところが
- 2 また
- 3 しかも
- 4 つまり
- 5 ところで

問題用紙 (国語)

問三 傍線部A「旅の効用」について、平戸遊学と東北遊歴での松陰のとらえ方はどのように違うのか。その説明として最も適当なものを、次の1〜5の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 平戸遊学の時は、自分が興味を持つ対象を発見するきっかけを与えてくれる点にあったが、東北遊歴の時は、各地で傑出した人物と交わることで自分の意力や知力が鍛えられる点にあった。
- 2 平戸遊学の時は、自分の心がものに触れたり感じたりして精神が活性化する点にあったが、東北遊歴の時は、そのあと広く学問をしてゆくための問題意識を養ってくれる点にあった。
- 3 平戸遊学の時は、自分が夢中になって学べる書物が見つかる点にあったが、東北遊歴の時は、多くの優れた人物との交流を通じて書物からは得られない知識を身につける点にあった。
- 4 平戸遊学の時は、かねて自分が知りたかったことを学ぶ機会が得られる点にあったが、東北遊歴の時は、出会った人物から自分を成長させる思いがけない影響を受ける点にあった。
- 5 平戸遊学の時は、普段は目にするのでできない書物から新しい知識が得られる点にあったが、東北遊歴の時は、普段は交わることのできない人物から新しい知識が得られる点にあった。

問四 傍線部B「こうした傾向」とはどういうことか。本文中の語句を用いて四〇字以内(句読点・括弧類も字数に数える)で説明せよ。

問五

① 波線部w「向ひ」、x「長き」、y「しむ」の文法的説明として、次表の空欄1〜7に入れるのに最も適当なものを、それぞれ後の選択肢の中から一つずつ選び、記号で答えよ(同じ選択肢を何度用いてもよい)。

語	品詞	活用形	意味
向ひ	1	2	/
長き	3	4	
しむ	5	6	
			7

(品詞)	ア 名詞	イ 動詞	ウ 形容詞	エ 形容動詞	オ 副詞	カ 連体詞
	キ 接続詞	ク 感動詞	ケ 助動詞	コ 助詞		
(活用形)	サ 未然形	シ 連用形	ス 終止形	セ 連体形	ソ 已然形	タ 命令形
(意味)	チ 自発	ツ 打消	テ 推量	ト 受身	ナ 尊敬	
	ニ 完了	ヌ 断定	ネ 伝聞	ノ 使役	ハ 可能	

問題用紙（国語）

② 傍線部Cを口語訳せよ。

③ 傍線部Cの訓読に従い、波線部Zの白文に返り点・送りかなを付けよ（送りかなはカタカナで記せ）。

問六 傍線部D「幕末青年武士の遊歴の特徴」とはどういうものであったか。本文で以下に続く高杉の書簡にもとづき、六〇字以内（句読点・括弧類も字数に数える）で説明せよ。

（以下余白）